



『街道をゆく』は  
近江からはじまった

司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム記録集

『街道をゆく』は  
近江からはじまった

司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム記録集



# 記録集発行にあたって

平成28年は、司馬遼太郎先生が亡くなられて、20年という節目の年でした。

この機をとらえ、なぜ先生は著書『街道をゆく』で、「近江からはじめましょう」とおっしゃったのか、ぜひこの滋賀の地で、そのご足跡や、お考えを学ぶ機会がつかれないかということ、

県、市町、大学、文化関連団体等で構成する司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム実行委員会を

平成28年1月に設立し、同年4月23日（土）に

滋賀県立文化産業交流会館でシンポジウム「『街道をゆく』は近江からはじまった」を開催したところ、

1,500人もの方々にご参加いただきました。

この記録集は、より多くの皆さまにシンポジウムでの「学び」を共有し、

『新しい豊かさ』を未来につないでいくことを目的として作成しました。

このシンポジウムの開催にあたり、企画の段階から準備・運営を務めていただいた実行委員の皆さまをはじめ、

ご登壇いただきました皆さま、

そして公益財団法人司馬遼太郎記念財団の皆さまから

多大な御協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成29年1月吉日

司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム実行委員会

『街道をゆく』は近江からはじまった  
司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム



## 基調講演



上村 洋行氏 (公益財団法人司馬遼太郎記念財団理事長／司馬遼太郎記念館館長)

昭和18年(1943年) 東大阪市生まれ。昭和42年 同志社大学法学部法律学科卒業後、産経新聞社入社。京都支局が振り出しで記者生活。昭和45年 大阪本社編集局社会部。その後、京都支局次長、文化部次長、メディア報道部長。平成7年 京都総局長。平成8年 大阪本社編集局局長。司馬遼太郎記念財団設立。同常務理事。平成11年 司馬遼太郎記念財団専務理事。平成13年 司馬遼太郎記念館館長就任 (兼務)。平成24年 公益財団法人司馬遼太郎記念財団理事長。

## シンポジウム<パネリスト>



山折 哲雄氏 (国際日本文化研究センター名誉教授)

宗教学者。岩手県花巻市出身。東北大学文学部インド哲学科卒業。東北大学文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、所長を歴任。専門は宗教史、日本思想史であるが、近年は宗教と文明の関係を研究対象にしている。著書は『神と仏』、『愛欲の精神史』、『日本文明とは何か』、『美空ひばりと日本人』、『「歌」の精神史』、『親鸞をよむ』ほか。



諸田 玲子氏 (作家)

静岡市生まれ。上智大学文学部英文科卒業。外資系企業勤務を経て、1996年『眩惑』で作家活動に入る。2003年に『其の一日』で第24回吉川英治文学新人賞、2007年『奸婦にあらず』で第26回新田次郎文学賞、2012年『四十八人目の忠臣』で第1回歴史・時代小説大賞作品賞を受賞。『お鳥見女房』『あくじゃれ瓢六』『きりぎり舞い』『狸穴あいあい坂』などのシリーズの他、『帰蝶』『ともえ』『美しいくさ』『波止場浪漫』『風聞き草墓標』など歴史・時代小説を中心に著書多数。近著は『今ひとつの、和泉式部』。



武村 正義氏 (元滋賀県知事)

1934年(昭和9年)、滋賀県八日市市(現 東近江市)生まれ。58年東京大学教育学部卒業後、同大学新聞研究所を経て62年同経済学部卒業。62年自治省(現 総務省)入省。69年埼玉県地方課長、70年自治省大臣官房調査官から滋賀県八日市市長を経て74年滋賀県知事(～86年6月)。86年衆議院議員当選(4期)。93年6月自民党を離党し「新党さきがけ」を結党、代表に就く。細川内閣で内閣官房長官。94年村山内閣で大蔵大臣(現 財務大臣)。現在、日中友好沙漠緑化協会会長、龍谷大学客員教授など。近著に『ムーミン・ハウスの窓から—武村正義著作集』。

## コーディネーター



古屋 和雄氏 (学校法人文化学園文化外国語専門学校校長・元NHKエグゼクティブアナウンサー)

1949年10月1日 山梨県富士河口湖町生まれ、富山県育ち。1972年3月、早稲田大学第一政経学部政治学科卒業。4月、NHK入局。東京のほか福井・釧路・大阪放送局に勤務。2013年3月、Eテレ「ここが聞きたい! 名医にQ」、ラジオ第一放送「日曜バラエティー」を以てNHKを卒業。同年4月、文化学園大学(東京都渋谷区)の教授として就任。同年7月、文化外国語専門学校校長を兼任。



## PROGRAM —プログラム—

### ■ 開会挨拶

三日月大造 (滋賀県知事・実行委員会会長)

平尾 道雄 (米原市長・実行委員会副会長)

### ■ 基調講演

『街道をゆく』がうまれるまで

上村 洋行氏 (公益財団法人司馬遼太郎記念財団理事長・司馬遼太郎記念館館長)

### ■ シンポジウム

『街道をゆく』は近江からはじまった  
パネリスト

山折 哲雄氏 (国際日本文化研究センター名誉教授)

諸田 玲子氏 (作家)

武村 正義氏 (元滋賀県知事)

コーディネーター

古屋 和雄氏 (学校法人文化学園文化外国語専門学校校長・元NHKエグゼクティブアナウンサー)



## <参考> 滋賀・近江が登場する『街道をゆく』の主な巻 一覧

- 1 巻『湖西のみち』 大津～安曇川～朽木谷
- 2 巻『韓のくに紀行』 蒲生 鬼室神社
- 4 巻『北国街道とその脇街道』 今津～敦賀～柝ノ木峠
- 7 巻『甲賀と伊賀のみち』 伊賀上野～紫香楽宮址～瀬田
- 16巻『叡山の諸道』 浜大津～坂本・生源寺、双巖寺、瑞応院、滋賀院門跡、日吉大社ほか、横川中堂～無動寺谷～大講堂
- 24巻『近江散歩』 不破の関から寝物語の里～柏原宿～彦根城～姉川古戦場～国友～安土城址～近江八幡



## 開会挨拶



滋賀県知事・  
実行委員会会長  
三日月大造

本日、司馬遼太郎先生がお亡くなりになって20年を記念したシンポジウム『街道をゆく』は近江からはじまった』を開催いたしましたところ、全国各地から大勢の方々にご参加いただきました、誠にありがとうございます。

ちょうど2年前の今頃、私はこの滋賀県の知事をめざすかどうか、人生の大きな決断を熟慮し、人間としての生き方、日本という国の行く末、近江と呼ばれたこの地域で、私たちは琵琶湖と共にどのように生きていけばいいのか、人と人が関わり合い、どのように暮らしていくことがいいのか、深く考えておりました。

そして今年、知事として終戦から70年という時を迎え、いま一度、司馬先生が書かれたもの、考えられたことを振り返りながら、この滋賀・近江の地で、皆さんと一緒に学ぶ機会をつくれないだろうかとシンポジウムを企画いたしましたところ、多くの方々にご協力をいただき、本日を迎えることとなりました。

自然から多くの恵みをいただくこの滋賀県・近江の地は、早くから渡

来文化の影響を受けた地です。街道があちこちらに通り、多くの人が行き交い、交流・交易がもたらされた要衝ゆえに、平安時代、鎌倉時代、安土桃山時代、そして戦国時代には多くの戦国武将が群雄割拠した、そういう地域でもございます。戦後は、第二次産業の力を伸ばし、日本の発展を牽引してまいりました。

一方で、開発や生活様式の変化により、琵琶湖をはじめ自然を汚し、山を削り、様々なつなかりを弱めてしまった面もありました。私たちはそのことを今一度顧みて、司馬先生が書かれたこと、考えられたことをたどり、次の時代をいかに生きていけばいいのか、この近江の地で皆さんと一緒に学び、ここから発信していきたいと考えております。

すでに多くの方から「次はいつ、どこで開催するのですか」と聞かれました。次のことは実はまだ考えておりません。司馬先生が深く、深く考えられたことを私たちが次の時代にどのように伝えていけばいいのか、皆さんと一緒に考え、これから

の企画をつくっていききたいと考えております。

本日、このシンポジウムを開催するにあたり、司馬遼太郎記念財団理事長の上村様をはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。県内の市町、図書館、大学、文化団体の皆さん、そしてこのシンポジウムに合わせて菜の花を植えよう準備してくださったボランティアの皆さんに厚く御礼申し上げます。

限られた時間ではございますが、ひととき司馬先生を偲び、司馬先生のお考えについて、ともに学ぶ機会としていただきますことを祈念申し上げ、主催者を代表しての挨拶とさせていただきます。

一緒に頑張りましょう。よろしくお願いたします。

## 開会挨拶



米原市長・  
実行委員会副会長  
平尾道雄

米原市民を代表して、ようこそ、この近江・滋賀、そして米原へおいでくださいました。心から歓迎を申し上げます。

本日のこのシンポジウムは『街道をゆく』をテーマとしております。その最初は近江なんですね。湖西、大津坂本から始まります。その後シリーズとして『近江散歩』等が出るわけです。「どうにも近江が好きである」と司馬先生がこの地を語り始めていかれます。私たちの米原市の東隣、関ヶ原町の不破関資料館から、我が米原の寝物語の里、今の岐阜県と滋賀県、美濃と近江の県境にある寝物語の里をご覧になり、中山道の柏原宿では、もぐさ亀屋佐京に立ち寄り、近江の商売についての考察をされた後、彦根、そして湖北を巡られました。

この中で、私は昔から大変感動を覚えている文章があります。司馬先生は、「伊吹山」は「胆吹山」と書くとおっしゃった。この「胆」という字は「胆力」「気力」、そして「精神力」を表しますが、呼吸することを古語で「息吹く」とおっしゃって、

「伊吹山は、たえず風や雲を息吹いている」と書いておられます。さらに、「古代人の山岳信仰では、山からおろしてくる風は神の息吹である」、「その姿を見るたびに、私の中に住む古代人は、つい神だと思ってしまう。」と伊吹山を語っていた聞いています。

私たち米原市民は、米原の地を「びわ湖の素米原」と言っています。それは、この伊吹山に降る雪も、そして雨も大地をくぐり姉川となり、また天野川となって琵琶湖に注いでいます。だからこそであります。京阪神、関西の人々の命の水となつている琵琶湖の上流にある大地、この源流、伊吹山があることで、米原市は琵琶湖の始まりの大地、町として責任と誇りを持って「びわ湖の素米原」と申し上げています。

私たちは、「土徳」という言葉を聞きます。「人徳」という言葉があるように、土地に徳があると書くのですが、いわゆる信仰風土、あるいは精神風土も含めて、土地が人を育てる、そんな意味があるのでしょうか。私たちはこの精神的な風土、日

本ならではの私たちの町を、いつ、誰が読んでも心を揺さぶる司馬文学として、語りとして、その中に私たちの米原を、そして米原に暮らす私たちの文化を、米原市民の郷土をまさに榮譽あるものとして語っていただいている、そんな思いで司馬遼太郎先生の文学に私たちは接して、お育ていただいています。

精神的風土、信仰的風土、このことが人をどう育ててきたのか。そして、これから私たちはどんな育ちを受けていくのか。経済なのか、風土なのか、景色なのか。経済ではないものに私たちは育ててこられたということに自信を持って、環境の問題や、そして安全の問題を今一度考えていきたい。そんな思いも私自身はさせていただいております。

本日のこのシンポジウム開催にご尽力いただきました皆様に、改めて敬意と御礼を申し上げます。開催地市長としてのお礼のご挨拶にさせていただきます。

本日はようこそ米原市においでくださいました。最後までよろしくお願いたします。





東近江市 菜の花畑

基調講演

# 『街道をゆく』が うまれるまで



公益財団法人  
司馬遼太郎記念館理事長・  
司馬遼太郎記念館館長

上村 洋行

## 『街道をゆく』の始まり

司馬遼太郎が亡くなって20年の年に、司馬遼太郎が大変好きだった近江の地でシンポジウムが開かれますことをうれしく思っております。

私からは『街道をゆく』には実は原型のようなもの、司馬遼太郎の『街道をゆく』取材の始まりがあったように思います。あわせて、司馬遼太郎がどんな視点で事象を見ていたのかという一端を皆さんにお伝えすることができればと思っております。

申し遅れました。私は先ほどご紹介いただいたとおり、司馬遼太郎の義弟になります。私の姉が司馬遼太

郎と結婚したものですから、義理の弟になるわけです。

私は、父親が高校のころに、母親が大学の半ばあたりで亡くなりまして、自立できていない学生でしたので、司馬遼太郎が見かねて一緒に住むと言ってくれまして、ずうずうしくも生活をともにしておりました。好き嫌いの一端も含め、司馬遼太郎との雑談、あるいは書いたものの中からその原型を少しとどけていきたいと思います。

『街道をゆく』は、版画家の棟方志功がタイトルを書いていました。1971年（昭和46年）1月から、司馬遼太郎が亡くなる1996年（平成8年）まで25年間、延々と続

いた長丁場の連載でありました。国内の街道が57、海外が11、計68街道。

「諸道」というタイトルもありますので、街道の数は前後するかもしれませんが、原稿用紙にして2万枚、膨大な執筆量だったと思います。

## 『街道をゆく』のスタイル

その原型に入る前に、『街道をゆく』のスタイルを少し皆さんに知っておいていただきたいと思えます。

週刊朝日の編集者の皆さんたちとよく話をしますが、『街道をゆく』が歴史、地理あるいは風土とあらゆる分野にわたっているの、「資料集めや下調べなど大変でしょうね」と聞かれるらしいです。その都度、

編集者の皆さんは手を振って、「そんなことはないです」と答える。

実際、司馬遼太郎という人は、全て一人で資料を集め、考え、そして書いていた。さまざまなことを調べ上げた上で現地に赴く。地図のようなものをそらで描けるぐらいに、現地を熟知して行っていたようです。

私は新聞記者をしておりましたから、取材だとノートを広げて、あらゆる会った人のメモを必死に書きとめたり、市役所等に飛び込んで、データを調べて記事にするという頭があります。司馬遼太郎は簡単なメモとスケッチを描いていることが多いですね。

目の前にあるちょっとした光景、気になった道具類、時には人の顔を描いたり、方言を書きとめたり、車の中やホテルに戻ってから構図をまとめてメモを追加することはありましたが、私どもとは全く違う方法で取材していました。現場では空気感に触れる、という感じでした。

取材旅行のスタイルも独特で、本来だったら、司馬遼太郎と担当の編集者、後にカメラマンがついて行き

ましたから、それで事足りるわけですが、『街道をゆく』の場合は、そこに司馬遼太郎の妻である私の姉も全て同行しておりました。それに知り合いの学者、作家、そしておもしろいのは、ライバルの新聞社、出版社の皆さんが加わるわけです。多いときには十数人になることもあったようです。

その取材旅行で皆さんが大変楽しみにしていたのは、夕食の後、毎晩のように司馬遼太郎の部屋に参加者が集まって、お酒も入り、車座になったの雑談会で、大変知的なエンターテインメントを感じたという方が多くいらっしゃいました。私も何度か加わりましたが、本当に旅とはこういうものなのかと楽しみを味わったものです。

私が茶の間や喫茶店等で司馬遼太郎と話している時に驚くのは、私から次元の低い話を持ち出しても司馬遼太郎の頭の中に入り、返ってくる言葉がいつの間にか文化論になっていたり、文明論になっていたりすることです。さらに驚いたのは、それがしばらくしてどこかのエッセイに

なっていたことです。

『街道をゆく』の車座の場でも、初めは参加者の話から始まりますが、やがて司馬遼太郎の独演会のようなになっていく。須田剋太画伯の後、挿絵を担当してくださった安野光雅先生は、「毎日、話の内容が違った。あんなに楽しい思いはなかった」とおっしゃっていました。

司馬遼太郎が亡くなった後で編集者の皆さんとあの時の話をメモしておけば、どんなにかもつと多くの人に知らせることができたのにと語ったことがあります。書齋の中で考えるだけではなく、旅行の先々で、人との話を通じてさまざまなことを考えながら思考を組み立てている節があります。

## 作家 司馬遼太郎

司馬遼太郎は作家に専業し始めた頃から、お正月はどこか旅先で過ごすことを習慣づけていました。

私が新聞社に入り、京都に赴任をした翌年の正月、司馬遼太郎は京都に滞在することにしました。京都ホテル、今の京都ホテルオークラの正





つ新聞社に出動するという変な生活が続いたのですが、実はこの時に『街道をゆく』が始まったということになるのです。というのは、私と姉と司馬遼太郎の3人に姉の友人で同僚の女性記者の最初は4人、10年近いうちに知人等が加わり、5、6人になった記憶がありますが、京都ホテルからタクシーで滋賀県を中心に、北陸、奈良といった方面に行きます。司馬遼太郎の関心のある場所を選んでいますが、参加する人を楽しませるという司馬遼太郎流の一種のサービスピ精神でもあったと思うのです。

月を私も体験するわけですが、正月になりますと、私の属している新聞社の支局で記者は、交代で休みをとるものですから、新人は元旦の泊まり勤務をやらされます。京都ホテルから支局に通うという本当にぜいたくな驚くような経験をしました。

以来、10年ぐら正月は京都に滞在していましたから、私はその期間の半分強を京都ホテルで過ごし、か

かを書いてほしいと依頼がありました。その時は、『坂の上の雲』の連載、朝日新聞には『花神』、新聞小説を2つ、月刊誌に3つ、4つ、週刊誌にも3つ、4つ連載するという超多忙な時期でありました。

### 司馬遼太郎の考え方

頭の中に朽木街道なんかがふっと浮かんで、滋賀県に決めたのかと思っていました。『街道をゆく』の2年前に、『歴史を紀行する』というエッセイがあり、これがどうも『街道をゆく』の前身のような感じがします。3回目かやはり滋賀県で、『街道をゆく』の書き出しを思わせます。

司馬遼太郎は自宅にいる時には毎

日のように午後の3時、4時頃に、散歩と称して、夫婦二人で出かけていました。散歩と言えは聞こえはいいのですが、実は喫茶店にコーヒーを飲みに行く。近くのそば屋さんに行く。私も何度か同席しましたが、やはりここでも姉である嫁さんと話をしつつ、自分の考え方を語っている。

私と語り合っている時にもふっと全く違う世界が広がることに驚きましたが、これは執筆の間の気分転換であると同時に、ものを考える時間でもあったのかなと思います。これは『街道をゆく』の車座と同じく司馬遼太郎の思考の一端がうかがえるように思います。

司馬遼太郎は「歴史小説というのは100年以上たたないと物事が見えてこない」とよく言っていました。関係者や環境などが人物には絡んでいきますから、なかなか本質が見抜けない時がある。それらが去った100年後、歴史が「乾いた」中で人物が浮かんでくる、そこで初めて小説として、その人物を捉えることができると言っていました。

司馬遼太郎の思考を「俯瞰法」と

とらえられていますが、誤解されて「英雄史観」や「権力志向」などと言われることがあります。そんなこととはないわけで、司馬遼太郎が常に言っていたのは、「できるだけ自分の目線を低く、つまり地面に置いて、物事を近くに寄って子細に調べる」とが大それだ、それだけではだめで、一旦、天に目線をあげて、こんどは全てを立体的に眺める」と言うんですね。つまり、複数の視点で物事を眺めなければいけないということです。

新聞記者はそういう視点でもって物事を判断しなきゃいけないということを経験記者の心得として、司馬遼太郎が勤めていた京都支局で言ったことがあります。私も聞いていました。未だにそのことを思い出されて話をされる方もあります。これが司馬遼太郎の考え方でした。

司馬遼太郎の青春時代には、アカデミズムの中でも、皇国史観もしくはマルクス主義史観で歴史を捉えていたところが多かった。司馬遼太郎は、これでは歴史というものは本

の姿が見えてこないと思い、自ら一市民の立場で、それらを脱色して「日本史」というものを自分の頭の中で何度も何度も編み直した」と言っていました。

### 作家 司馬遼太郎の原点

「22歳の自分」が、どうも司馬遼太郎の作家生活の原点のようなどころがあります。これは学徒出陣で旧満州にある戦車学校に行き、昭和20年の春に本土防衛ということで、栃木県の佐野に戻ってまいりますが、この頃戦争について随分考えた。今の時代の軍人や官僚がこういう事態を招いたのなら、江戸時代や戦国時代の人が、今生きていたら、同じことをやっているだろうか。戦国時代、江戸時代の人たちならどうしたか、と考えたが、「22歳の自分」は答えることができなかった。だから自分の書いている小説は、「22歳の自分」に対する手紙だ」と言ったことがありました。同時に、その「22歳の自分」に褒められるとすれば、「誰の力もかりずに、自分一人て日本史を何度も何度も編み直していたこと

だ」とも言っていました。

司馬遼太郎にはおもしろい癖があつて、それぞれの土地に行くとき、目の前にある建物あるいは鉄道などを一旦全部消し去って、原野にして、また一瞬にして元どおりに組み立て直す作業を大変好んでやりました。そういう訓練を若い時からすると同時に月明かりの下で物事を見るよりは、太陽の明るい所で物事を見ないといけない、色ががねで物事を眺めないという姿勢をずっと貫いたんだと言っていました。

司馬遼太郎が60になれば小説を書かないほうがいい、と言っていました。司馬流の小説を書くには大変エネルギーが要る。そのエネルギーが枯渇する時には、小説はやめたほうがいい。以来、『街道をゆく』と『この国のかたち』、『風塵抄』に変わっていく。司馬遼太郎は、もちろん才能があつたと思えますが、同時に、若い時から大変努力をした人だつたと思つています。

司馬遼太郎は「経済」という目線でも時代を捉えていた。室町期から信長、秀吉の楽市・楽座を経て、江

戸期に成熟していく商品経済の仕組みを随分考えました。商品経済が発達するということは、数量的に把握する人間ができていく、あるいは質というものを考える、お金を信用することから倫理観のようなものも育ってくる。これは小説『菜の花の沖』の中でも商品経済のことが物語の背景として随所でべられていきます。

『街道をゆく』というのはまさに司馬遼太郎の視点で、街道を歩きながら膨大な歴史を分け入って、同時に地理的な空間を往来する。時にはモンゴル、あるいはオランダ、あるいはポルトガルというふうな外国にも足を運びつつ、「日本人」あるいは「日本」を考えた。つまり、「日本人論」「日本論」が『街道をゆく』ではなかったかというふうに思います。

司馬遼太郎のいろいろな物の考え方が、『街道をゆく』という紀行をする中で、日本の姿を小説とは違った観点で捉えていたというように思えます。



## 『街道をゆく』は近江からはじまった

パネリスト

■山折 哲雄氏 (国際日本文化研究センター名誉教授)

■諸田 玲子氏 (作家)

■武村 正義氏 (元滋賀県知事)

コーディネーター

■古屋 和雄氏

(学校法人文化学園文化外国語専門学校校長・元NHKエグゼクティブアナウンサー)

(以下敬称略)

**古屋** 1971年から1996年に旅立たれるまでの25年間、ご自身の最も長い連載として歴史・風土を時代で描く『街道をゆく』が本日のテーマですが、まず司馬さんとの関わりといましようか、山折さんは、どういうお付き合いでいらっしやいましたか。

**山折** 司馬さんには、シンポジウムなどで3度ばかりお目にかかっておりました。1回目は、永井路子さんと一緒にシンポジウムに出たことを覚えております。最後は1995年にNHKで日本の歴史・文化・宗教について対談をさせていただきました。

この年はご承知のように1月に阪神・淡路大震災があり、3月にオウム真理教のテロ事件が発生しました。司馬さんが、この年は日本人の自然に対する考え方、宗教に対する考え方が大きく揺さぶられ、変わっていく起点になる年かもしれないと言っておられたことが非常に印象に残っておりますね。

2つぐらい、その時の話で非常に強く印象に残っているがございます。

もう1つは、歴史の中の女性の描き方です。ほとんどが名前さえ伝わっていません。現在はかなり調べも進んでおりますが、以前は描かれていなかったもので、その空白を埋めたいと私は女性を主人公にするようになりました。

でも司馬さんは女性を人格としてきちんと描いていらっしやる。読み直してびっくりしたのです。例えば『梟の城』の小萩さん、お雪さん、『侍大将の胸毛』とか『女は遊べ物語』とか、とてもおもしろいものがいっぱいあるんですね。そこに出てくる女性たちも生き生きして、凛として、でも、したたかで、かわいくて、こういう女性を描く歴史作家がいたのだと。司馬さんが女性をよく理解した上で描いてくださっているのだと再認識しました。

もう1つは、「菜の花忌シンポジウム」に最初に出た時のテーマが『街道をゆく』、何冊か読んではいったのですが、全部となるとあまりにたくさんで、どうしようかと思って読みはじめたところが、とてもおもしろ

## 『街道をゆく』は近江からはじまった

司馬遼太郎20年記念シンポジウム



1つは、キリスト教のような一神教。特に宗教の重要な特色は人間を飼いならすところがある。そういう意識、飼いならすというのは危険な言い方ですよ。結局、オウム真理教の事件というのは、日本の宗教が若者たちを飼いならすことに失敗したのだという思いを込めて

言っておられたような気がします。そのキリスト教の一神教的な特色にいちばん近い日本の宗教は何か。やはり若い者たちの心を動かすことができなかつた、開眼させることができなかつた浄土真宗ではないかと、

その文脈の中で語られていたような気がします。これは非常に重要な問題ではないかと思いました。

もう1つは、日本人の「おかげさまで、何々させていただけます」という言い方ですね。向こう側のある力によって、自分がさせてもらうという感覚、その考え方の基本に、やはり浄土真宗の考え方があるのではないか。そういう点では、近江という国は、特に蓮如の時代に日本仏教の心情的な性格を強く持つ浄土真宗、つまり蓮如教団が広がったところという認識があつたという気がい

たしますね。

**諸田** 私は残念ながら、生前の司馬さんにはお会いしたことがないのですが、司馬さんの「菜の花忌」にも何度か登場させていただきました。歴史小説を書いておりますし、本当に司馬さんのことが大好きなので、ここに参加させていただいたのだと思うのです。

若い頃に最初『梟の城』を読み、それから少し経ってから『燃えよ剣』のお雪さんと土方歳三のラブシーンに胸をときめかせたり、『竜馬がゆく』に夢中になっていたのですが、私が小説を書いたのは40歳近くになってからなんです。学校でも歴史がいちばん苦手でしたから、まさか歴史小説を書くようになるとは思いませんでした。ところが司馬さんの小説には共感することが何箇所もありました。

1つは『関ヶ原』です。私は合戦が大嫌いで書けなかつたのですが、西につくか東につくか、皆が人間として迷っている描写に感銘をうけました。こういう書き方もあるのだとわかつたのは、すごく大きなことでした。



い。それに文章が美しく、もしかしら小説なのではないかなと思いましたが。須田画伯が出てきたり、運転手さんが出てきたり、一言だけで場面が浮かんで来て、一篇読むとドラマを見終わったような感覚がする。『街道をゆく』は司馬さん独特のものなんだというのが3つ目の目から鱗の経験でした。



■武村正義氏

武村 私、東京での会合とか、レストランではったりお目にかかって挨拶をしたことはありませんが、何時間もかけてお目にかかったのは2回だけです。

1回目は、琵琶湖畔、大津にて朝日新聞の対談で初めてお目にかかりました。司馬先生と琵琶湖を眺めていると、いきなり司馬先生から「武村さん、この琵琶湖は五百年もつと請け負えますか」と厳しい質問がございました。私は思わず「請け負え

ません」と答えました。「そうでしょうね。百年もちましようか。」と、こうおっしゃった。

京阪神も日本の主要な街も、百年はもたないかもしれない。土建国家日本といわれている最中でしたが、日本の国土を好き放題に荒らして、こんな国がもつかどうかという大変な危惧を持っておられたのだろうと思います。こういう会話から対談が始まったのを非常に印象強く覚えています。琵琶湖の水質問題から琵琶湖総合開発等あれこれお話になりましたが、粉石礫運動の話になった時は、これは日本の歴史で一つの項目として将来残る大事な出来事ですよとおっしゃった。それほど尊い出来事だという意味でしょうかね。そんな形で3時間ぐらい会話をさせていただいたのが1つ。

もう1つは、亡くなられる1年半ぐらい前でしょうか。当時私は大蔵省の仕事をしておりまして、住専とか銀行の不良債権とか、問題でばたばたしておりましたが、ある時、ある新聞社の偉い人がやってきて、司馬さんからの「武村さん、今が最大

で、そして最後の試練です。頑張ってください。」というメッセージをわざわざ伝えてくださった。大変うれしくて、司馬さんに直接電話をかけました。それから何日かして東大阪のご自宅を訪問しました。朝10時頃から夕方5時頃まで7時間ぐらいい、たくさんのお話をいただきました。

最初に「武村さん、いろいろ考えてみたんだがね、なかなかいい言葉がないんだ。」とおっしゃった。何のことかわからなくて、きょとんとしていました。当時、自民党の河野洋平さん、社会党の村山富市さん、私、新党さきがけの武村の3人で、自民・社会・さきがけの連立内閣ができて、ハト派政権とも、リベラルとも言われました。そのリベラルという英語を漢字に当てはめても、なかなかいい言葉がないんだという意味だったのです。1つあるのは「忠恕」。辞書を引くと、「真つ直ぐに人に優しい」と書いています。強いて話すと、これぐらいしかないというのが司馬先生の答えでございました。

最後に玄関で靴を履いていたら、

新聞に『風塵抄』を出されました。司馬さんが亡くなられた日に出た文章です。その最後に、こう書いてあります。「住専の問題がおこっている。この事態に、せめて公的資金でそれを始末するのは当然のことである。パブルの始末、その痛みを通じて、土地を無用にさわるのがいかに悪であつたかを国民の一人一人が感じなければ、日本国に明日はない。」

住専に税金を使うことは正しいと書いて亡くなられたことは、遺言みたいですが、非常に私の印象に残っていて、ありがたいメッセージだと思っております。

古屋 なぜ『街道をゆく』がこの近江から始まったのか。なぜ近江がこれほどお好きなのかという本題に入っていきたいと思えます。



■山折哲雄氏

山折 司馬さんが小説をお書きにな

ることをやめて、晩年の大きな仕事としてはじめたのが『街道をゆく』と『この国のかたち』です。『この国のかたち』の最初の文章は、非常に印象的でした。「日本人は、いつも思想はそこからくるものだともっている」。さりげない表現ですが、重大なメッセージだと私は思います。

日本列島では自生的な思想というものには育たなかつたから、この国の形を考えたり、文化の形を考えたりする時、どうしても外からの思想に頼ってきたというのです。それが仏教であつたり、儒教であつたり、キリスト教であつたりとなるわけです。にもかかわらず、これだけの文化・文明を発達させたのはなぜか。

『この国のかたち』では、最初に神仏習合の問題が出てくる。これが非常にしつこく議論されており、神仏習合の起点をどこに置かうかということも、またおもしろい。奈良の東大寺です。仏教の華厳経も論じ始められる。そこに関わるいろんな儀礼について、調べたり、文明論を展開される。神仏習合の中の仏教は、

外来宗教であります。それを受け止めた土着の神道が重要な役割を果たしたのではないか。思想はそこからやってくるが、そのところからの思想をどのようにして受容したか。この問題がどうも晩年の司馬さんのお考えの中に重要な位置を占めていた。これが1点ですね。

同時に、日本全国を歩いてみたら、日本列島固有の文化もあるんじゃないか、それは何か。これを探すために対談を始めたのではないのか。いろんな要素を議論する過程で、外国へ出て、街道を歩いて見て比較をするということが1つですね。

もう1つ付け加えますと、晩年になって、アメリカ嫌いの司馬さんがアメリカに行かれる。例えば中国大陸の彼方のモンゴル、ヨーロッパの辺境のアイスランド、そういう辺境の地まで歩いて考えようとした。その中で、アメリカは一番お嫌いだったけれども旅をされた。後に『アメリカ素描』にまとめられるのですが、ニューヨークを歩いている時の感想が振るっている。自分は、初めてアメリカに行つてニューヨークを歩い

「明治維新に例えると、武村さんは大村益次郎だな」とおっしゃった。実はピンとこなくて、帰つてから『花神』という小説があるのを発見して急いで読みましたが、こんな偉い人とは思っていません。私なんか関わりはないと思つたのですが、日本の歴史が必要とした時に忽然と現れて、仕事を終えたら、さつさと消えていったので、お世辞でもおっしゃっていただけたのなら、大変嬉しいと思っております。

もっと嬉しかったのは、私が大蔵省の仕事を辞める頃のことです。パブル期に銀行が子会社をつくつて、どこどこ金を貸して不動産の商売をしていたのが、パブル崩壊で全部、不良債権になった。銀行が皆、潰れてしまいかねないぐらいの巨大な不良債権が日本の金融界にできてしまった。これが、当時最大の経済問題でした。そこで、当時6、850億円という皆さんの貴重な税金を使って住専問題を解決することを決めました。それに対して、わんわん批判が出ました。

そのど真ん中に司馬先生が、産経

ている。いろんな人種の人間が歩いている。いろんな言葉が語られている。その中を、自分は平気の平左で歩いている。なぜ、こんなに平然とニューヨークの街を歩いているのだろうか。

こう自問し、こう自答されています。自分の両肩の上には、千年の歴史が積み重なっていると。ここですよ。その千年の歴史を考える起点が、もしかすると天智の近江王朝だったのかもしれない。それで、近江に着目されたのではないのか。そういう点では、晩年の『街道をゆく』と『この国のかたち』は、その問題意識で合致するわけです。ただ、近江王朝は2代で潰えます。やがて、奈良で平城京が始まつて『この国のかたち』がつくられるわけです。その時に、神仏習合というテーマがあらわれ、それに取らかられたのではないかと気がしています。

古屋 精神的なふるさとがここにありません。ではないかと、ずっと考えていたということでしょうか。

山折 それがあるから、自信を持つて歩くことができた。司馬さんら

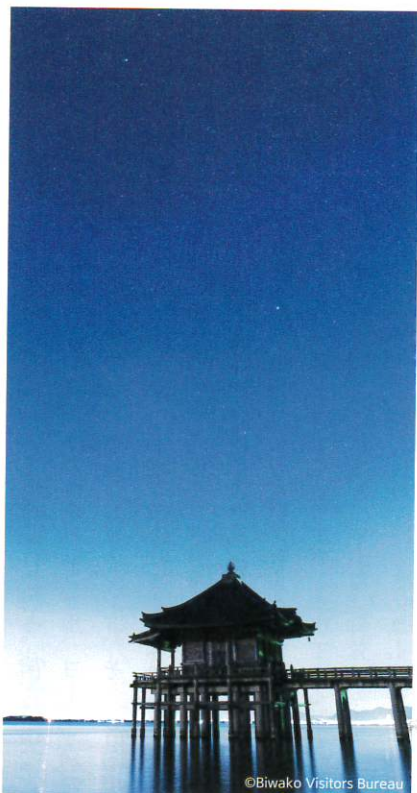


いとも、司馬さんらしくないとも言えるようなメッセージですね。  
**古屋** 諸田さんは、「近江から始まった」魅力は、どんなこととお考えですか。

**諸田** やはり琵琶湖です。近江というのは、淡い海とも書きますね。私も平安朝の小説を書いています。都の人たちは海を知らなくて、海というのは琵琶湖のことなんです。逢坂の関を越えて、海を見たという感激が、この琵琶湖にある。

また戦国時代には、いろんな所でお城を造って合戦をした。信長が安土城を築きますよね。司馬さんが中学生で初めてこの安土城跡に登った時の「記憶が一枚の水色の写真のように残っている。山が、ひろがってゆく水のなかにあった」という、短い文章があります。

向こう側に京都がある琵琶湖まで来た時に、信長が初めて自分が神になれるんじゃないかと感じたのが安土城だと思います。信長だけではなく、いつの時代でも、この琵琶湖に人が逢うのはとても衝撃というか、駭蕩とした春の気分と司馬さんは、



浮御堂

『近江散歩』の中もおっしゃっています。

それと芭蕉です。「行春を近江の人とおしみける」という句がありますが、芭蕉はやはりものすごく近江を好きなんです。41歳から51歳までの間に9回も訪れているのです。「偏に膳所はふる里のごとく存じな候」近江は自分のふる里だという手紙を友達にいろんな形で書いています。

芭蕉は伊賀上野の生まれですが、51歳に大阪で亡くなった時に、何とでも大津の義仲寺に埋葬してほしいと遺言し、遺体が運ばれて、実際にそこにお墓があるのです。芭

蕉も近江を愛していたので、二人がつながっているような感じがします。

芭蕉は「軽み」ということをよく言っています。芭蕉は、当時の人々が俳諧でお金を稼いだり、権威主義になるのをとても嫌っていた。芭蕉が全国を旅していたことに司馬さんが感激したということも司馬さんの小説を読んでいると感じられます。人を思う温かみと、いい意味で俯瞰的に人間を見る超然としたところ。愚かしさ、いとおしさみたいなものを本当に駭蕩とした気分が包み込むのに琵琶湖が欠かせない。だから、芭蕉が愛したように、司馬さんも近江を愛したのではないかと思います。

刻に心配をなさっておりまして。好きな近江だけでも、放っておくとひどいことになるという危惧も大変持っていたのだと思います。

**古屋** 実は『近江散歩』の中に、こんな文章があります。

「私たちの滋賀県は、びわ湖の悲鳴に真剣に耳を傾けようとしている。びわ湖の水を、もうこれ以上汚さない、できれば少しでもこの碧い湖をとりもどすために、行動を起こそうとしている。それは試行錯誤の続く道であることも知っている。」（『水と人間』）

「これは市民運動側の文章ではなく、知事の文章である。こういうすばらしい文章を書く人が琵琶湖の守り手であるというただ一点に、希望をつなぐしかない。」というふうに、これは武村さんのことですね。

**武村** 司馬先生は、歴史上の政治はたくさん小説にされましたが、今の生々しい政治家とはほとんどお会いにならない。たしか対談もされていない。私は当時、政治家といえども地方の知事でしたから、それで

す。

**古屋** 芭蕉もいろんな旅をして、司馬さんと同じだというお話ですが、「私にとつての旅」という文章がありまして、その中で、司馬さんは、その「山川草木のなかに分け入って、ともかくも立って見ねばならない。」と。

「たとえ廃墟になっただけの土くれしかなくても、その場所にかぎりの天があり、風のおいがある文化を見ることできるし、その文化にくるまって、車馬を走らせたかばおげな権力者、粟粥の鍋の下に薪を入れていた農婦、村の道を歩く年頃のむすめ、そのむすめに妻問いする手続きについて考えこんでいる若者、彼女や彼を拘束している村落共有の倫理といった、動きつづける風景を見ることができ」

これが旅の楽しみである、とおっしゃっているのです。

今の「行春を近江の人とおしみける」というのは、春の近江の方の人情といましようか、それが細やかに鷹揚なところが似ているのです。

会ってもらえたのだらうと思えます。

『街道をゆく』の中で二、三か所取り上げていただいたのは、本当に身に余る光栄です。

**古屋** 山河を惜しむ心こそ、人間が地上に生息する基本的な文化というものではないかとおっしゃっていますが、このあたりの司馬さんの哲学といましようか、日本というものに対する考えは、どんなふうにお感じになりましたか。

**山折** 司馬さんには終生、ある葛藤があったと思うのです。思想や文学の作品の代表的な主人公は、どうも南方系、黒潮文化で運ばれてきた文化の波動に乗って活躍した人間が非常に多い。西郷隆盛がそうですね。坂本龍馬がそうです。これはもう明らかに黒潮文化の流れです。それから、高田屋嘉兵衛。それに正面からお書きになっていませんが、日蓮がそうだし、南方熊樺がそうです。司馬さんがお書きになった空海も入るでしょう。全部、黒潮文化系の人間だったと私は思います。

波に乗って島伝いに北上してきた



大中の湖干拓地

ね。武村さんは、司馬さんが近江のどこいところがお好きだったと思われるか。

**武村** 司馬さんは、先ほど古屋さんが朗読された冒頭にも、あるいは24巻『近江散歩』にも、私は近江が好きであると繰り返して伝えておられるのですが、なぜ好きだったのか質問したことはないで、どう答えられるのかなと思。

ここに書いてあるように、近江の人とのやりとりもあつただろうし、琵琶湖の風景も自然もあつた

らう。また、歴史を考えると、近江の国は古代、中世、近世、と続いている土地なんです。平安京ができる前から大津京もありましたし、近江も随分と長く栄えていましたから、見ればみるほどいろんな歴史の痕跡があつて深みのある土地だということも、関心を深められた理由かな。これは僕の平凡な憶測ですが、自然と歴史の両面があると思っております。

しかし、片方、先ほどお話のあつた安土城へ登られた時の感想として、「のぼりつめて天守台趾に立つと、見わたすかぎり赤っぽい陸地になっていて、湖などどこにもなかった。やられた、とおもった。」と書いておられる。先ほどご紹介された時は周囲が湖であつたということでした。中学生の時はそうだったけども、再び行ってみると、みんな埋め立てられて、大中の湖干拓とか、経済的な開発行為で様変わりして、大変がっかりされている。琵琶湖の将来も放っておけば、どぶ池になるのではないかとさえおっしゃって、深



日本民族の源流の動きと、非常に密接な関係がある。中国大陸の南部から宮古、琉球諸島、島伝いに北上してきて日本列島を発見し、住み着く。こういう人々は、ふんどしが似合う。空海は、もしかしたら、ふんどしが似合う。道元、親鸞は全然似合いませんよね。これは半分冗談ですが、そういう黒潮の流れに乗って日本にやってきた文化の中から、日本の中央権力に異議申し立てをする勢力が生まれ、革命を起こす。また、それが躍動する物語をつくる上で非常に効果的だったということもあるでしょう。

ところで、この日本列島で権力を握った側は、中国の儒教文化を受け容れた中国大陸の北方系の文化ですね。奈良、京都、そしてこの近江もそうであって、その南北の対立の中で日本の歴史が展開していくという考え方があったと思いますね。司馬さんは、黒潮文化的な英雄を主人公とした小説を書いた後、その葛藤を抱えながら何とかバランスのとれる見取図をえようと各地を旅して歩くようになった。



■ 諸田 玲子 氏

南方系の血の騒ぎと北方系の秩序思考という対立の構造を前提にして街道を歩かれた。日本の権力構造とはどういったものだったのか。大衆の生活の隅々にまで視線を延ばして考えていくという動機が、ありだっただけではないか。

**古屋** なるほど。司馬さんの「思索紀行」とよく言われますが、もの考え方を持っていて紀行して行くということだろうと思います。

もう一つ、歴史の大きな舞台として、この琵琶湖周辺はすごく重要な場所ですね。その辺はいかがでしょうか。

**諸田** 私は彦根や安土城を舞台に信長の奥さん等いろいろなものを書いていますので、滋賀の方には本当にお世話になりました。第二の故郷のように、この辺りをうろろしているのです。司馬さんの小説は『梟の城』

からと申しましたが、最初に書くものは自分が思ったことがぐっと出てくるようなことがあると思うのですね。

『梟の城』は皆さん御存じの忍者のおもしろいドラマチックな話です。復讐のために権力者をやっつけようとして、最後にここで殺すかなと思うと、殺さないんですね。生き生きとした女性が出てきて、二人の日常の場面でハッピーエンド。

司馬さんは、新聞記者でもあらたし、琵琶湖の水の話や住専の問題もありましたけれども、いろいろ政治に対して幻滅や憤りを感じながら、小説を一つ一つ書いていた。だから、実際の政治家には会おうとしなかった。昔の権力者に対する批判を書くことでそうした思いを伝えられたのではないのでしょうか。

今も先生方がおっしゃったように『街道をゆく』を書かれるようになって、日本人は一体何なのかと考えながら、いろんな土地を訪れるようになった。たとえば司馬さんの文章の中に、御斎峠に老人がいる。その老人の顔から何か歴史がにじんでいる

いか。

**古屋** 『近江散歩』の中に、やはり国士は公のものであるという古代以来の思想が重ね合わされてこそ、健康なんだ、この公の意思というものが日本人から抜けてしまっているのではないかとおっしゃっています。

**山折** 先ほどの風土の問題で言いますと、滋賀県・近江の国というのには、もちろん琵琶湖が1つ大きな問題になります。近江の国を語る時には、やはり琵琶湖と山、比叡山だろ

んじやないかと、どんどん思いが広がってゆく。近江の駱蕩とした春の景色、豊かな水に通じるど芭蕉も言いましたけれども、世間的権力とは別のものが司馬さんの中で大きくなっていたのではないのでしょうか。

それが司馬さんの一番すばらしいところ、私がいいなと思うところですね。

**古屋** 風土がその土地の人たちを育てることがとても大事なことで司馬さんがおっしゃっていたような気がするのですが、改めていかがですか。

**武村** それは、そのとおりでしょうね。でも、司馬先生というのは知の巨人だし、ありとあらゆることに詳しい人だから、ちよつと凡人には想像できないですね。ただ、司馬先生が小説をおやめになってから2つ警告をされていた。1つは、過去の歴史からの警告ですが、明治憲法下で、我々日本国は憲法の解釈を誤って非常によくない道を歩んだ。それは軍国主義の日本ということですね。憲法じゃ確かに天皇は陸海空軍を統

帥するという言葉があるのですが、この天皇の統帥権なるものも、軍部の参謀連中が独断解釈をして、国会も総理大臣も、場合によっては、天皇の意向を聞かなくても、我々でこの国の戦争はどうでもできるんだという間違った判断をした。統帥権の解釈の間違いですね。

**満州事変**を起し、日中事変を起し、太平洋戦争を起し、日本は大失敗をした。このことを司馬さんは「異体」の日本、遺伝子が違う日本だというふうにおっしゃった。

集団の自衛権なんかも、ああいう解釈改憲をどう思われるのだろうか。また、同じ道を繰り返しているという危惧をお感じになったのではないかと。憲法解釈の問題ですからね。

もう一つは、先ほど土建国家日本という表現を使いましたが、司馬さんが東大阪へ住まいを移した当初は、田んぼがたくさんあった。だんだん乱開発をされて、自分の目の前にある150坪の畑ではおぼあさんがネギを植えて、1本5円でタマネギを売っているが、実はこの土地の値上がりを待っているのだ。当時



比叡山延暦寺

れた文化や寺院や神社が新しい価値をつくり出していった。比叡山が中心だったと思います。13世紀の法然、親鸞、道元、日蓮などが、あの山で修行して、そして山に抵抗して下りていく。ここから戦国までの革命的な動乱の時代が始まるわけですから、そういう点では、近江における比叡山は、琵琶湖と同じような比重をもつて考えなければならぬだろうと私は思っています。

もちろん、『街道をゆく』での比叡山の取り上げ方もそうなんです。司馬さんはどちらかというと、比叡山には冷淡だったように思うのです。現在、滋賀県民の方々が琵琶湖は最大限口にされますけど、あんまり比叡山のごとは語られない。これから、近江を考える場合には、歴史なり将来を考えると比叡山を持つ意味は非常に大きい。

比叡山千年の歴史の中で重要視された論題は4つありました。それは比叡山自身が言い伝えていることです。1つ目、「論温寒貧」と言うのです。1つ目、「論」というのは徹底的に議論する。批判し合う。万巻の書を読む





彦根城

ということですが。2つ目、湿度です。比叡山に上がるとじとつとした湿気に襲われるんですよ。あれとの闘いは病気になったり、命を落としたり大変なものだったと思います。そこに「寒貧」ときます。寒さと貧しさ。この「論寒貧」の千年、これは近江の文化というものを根底で支え、もしかすると日本文化のベースになり、日本人の気質もつくり出している。

ここで、先ほどの黒潮の文化と結

び付くわけですね。しかし、同時に比叡山は権威化し、政治と宗教を腐敗させる原因にもなる。そこから変革期の人間が出てくる。そういう両面を見ていたのが司馬さんです。

下剋上の世界ですね、明治変革期の統帥権問題というのもそうですね。13世紀から15世紀ぐらいまで、一向一揆の時代。それから信長、秀吉、家康の戦国期。文献的にも「下剋上」という言葉が出てくるのは、15世紀までです。下剋上問題というのは、近代の統帥権問題を考える上で、やはり重要になるのではないかとこのことを考えますと、動乱の時代に人材を輩出した比叡山というのは、やっぱり重要なんですね。

**古屋** 反対側の彦根の方は、諸田さんの土壌です。

**諸田** 統帥権とかいろんな話が出ましたが、今、司馬さんがここにいらしたら何とおっしゃるのでしょうかね。『近江散歩』の中で、琵琶湖が猛獣の餌になったみたいな書き方をしているんじゃないかと思いたよ。

『街道をゆく』を読んでいて、自分がいるんな所を取材している時

と重ね合わせて思うのですけれど、私たちの旅という大体が何かを食べに行くとか、城を見に行くとかです。私は彦根城も大好きですし、安土とかいろいろ行きますがお城を見るのだったら、インターネットでも資料でも見られるわけです。でも、そこに住んでいる人とか、空気感とか、何か書かれていないものを見に行くわけですね。

『街道をゆく』は、私たちの旅と、ちよつと違うということがメッセージとして伝わってくるような気がするのです。今一番はまっているのは、そこにいる人たちの顔なんです。例えば、多賀大社に行く。そこに住んでいる人の顔やその時の空気とかいうものを今の私たちは忘れすぎていないんじゃないかと感じながら、最近取材をしています。

さつき利那的なことを言いましたが、司馬さんの取材の集大成として『街道をゆく』ができたんだということは何より感じています。

**古屋** どこに行っても、ミニ東京みたいな状況になっている中で、この地域や地方はどう存立するのかがあ

ね。  
15世紀に蓮如上人が琵琶湖周辺で非常にエネルギーな伝道活動をし、親鸞の教えを広めたということです。それは、仏恩報謝の気持ちで念仏を唱える、恩と感謝の仏なんです。近代的な契約関係というのは、債権・債務の関係ですね。借りたものを、そのとおりに返すという債権・債務の相互契約が成り立っているわけです。

ところが、恩と感謝の大衆道徳、あるいは商業道徳というのを経済言語で表現すると、自分の与えたもの

の意味大きな問題だと思えますが、武村さんは、滋賀・近江がきちつとした存在であるには、どういうことが必要だと思われませんか。

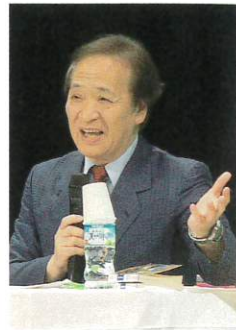
武村 歴史の深みというか、自然の山と湖を中心にした、金で買えない特色を滋賀県は持つて存在していますから、この2つの特色を損ねないように、できたらもつこの特色が際立つような滋賀県政であつてほしい。どんどん田んぼを潰して、山を削つて工場をつくるというやり方だけではなしに、むしろ大事なものをより生かせるような滋賀県づくりをしてほしいと思っています。

私の時代はもう工場はたくさんありましたから、第三次産業をもつと誘致しよう。大学を誘致しよう。ホテルも誘致しよう。レストランも誘致しよう。三次産業に力を入れようとして始めました。その後ずつと歴代の知事が努力してくれまして、今はもう滋賀県の第三次産業も非常に大きくなってきました。これからもこの自然と歴史と調和した滋賀の県づくりを目指して頑張つていってほしいと思っています。

は最小限に評価し、他から与えられたものは最大限に評価する。債権・債務の相互主義に対して、債務至上主義だと私は言っているんです。これは近代ヨーロッパの経済倫理には存在しない考えです。そういう考えをひろめた中心地が近江で、それを継承したのが近江商人。日本全国に経済的な1つの文化圏をつくることにつながったのではないかと思つているんですよ。

だから、近江商人の「三方よし」は、「仏法よし」の第4の問題があるんだということ考え直さなければならぬだろうと思うのです。これは近江だけじゃなくて、日本全国の問題ではないかと思つてみたいですね。  
**諸田** 今、人工知能とかいろいろなものが出されますが、どんどん失われていくものがあるような気がしています。それは司馬さんが一番危惧されていたことだと思います。

滋賀県の方って優しすぎて、ちよつと控えすぎるんじゃないかなという気がします。私たち、多賀とかいろんな所に行ったのですが、紅葉なんか京都よりずっと美しい所

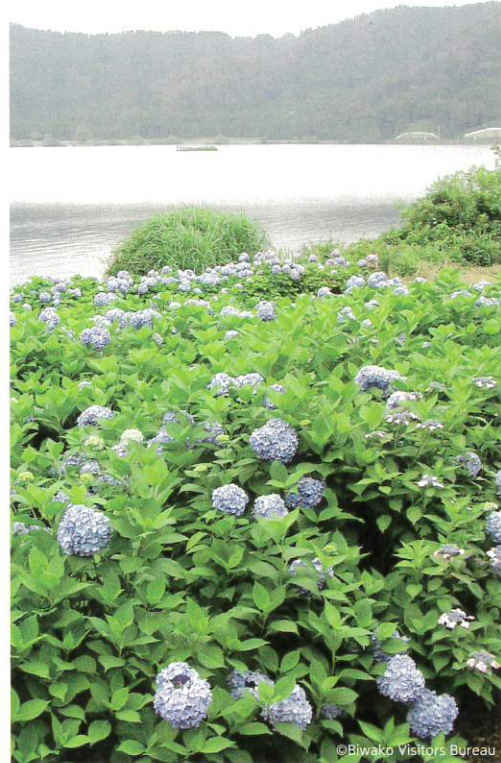


■古屋 和雄氏

**古屋** これだけ司馬さんがお好きだった近江に、何かメッセージをいただければと思います。いかがでしょうか。

**山折** 私、昨年初めて伊吹山に登りました。1,300メートルぐらいありましたか。もう死ぬ思いでした。その時気がついたのですが、薬草が非常に豊かなんです。『街道をゆく』の近江の編を読みますと、伊吹山はもぐさが大量に採れて、しかも良質で、それを近江商人が全国に宣伝し売り歩いたと。私もお灸でもぐさにお世話になったことがあります。それは知りませんでした。

それから、2年前、何十年ぶりの満月に余呉の湖を見ました。あの景観はすばらしい。またいろんな面で産業を発展させてきたことも、『街道をゆく』を通していろいろ知らされました。



余呉湖あじさい公園



# 『街道をゆく』に登場する滋賀県の主な地点マップ



⑦寝物語の里



⑧馬見岡綿向神社



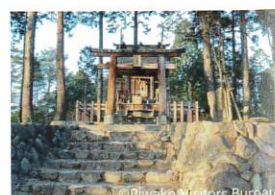
⑨賤ヶ岳



⑩姉川古戦場



⑪鬼室集斯の墓



⑫紫香楽宮跡



①安曇川



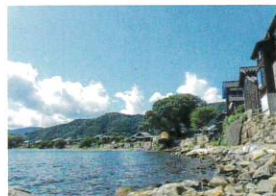
③朽木陣屋跡



⑤余呉湖



②興聖寺



④海津



⑥国友鉄砲の里資料館

がたくさんあるのになどよく感じました。

『街道をゆく』でもう1回、滋賀県の地図を見てみると、滋賀県って広いんですね。

もっともずっと滋賀の人が発信して、こんなにすてきな所ということ、そして人情を忘れないで、日本の他の所がどんどん新しくなってしまう所を、ぜひぜひ皆さん残していただきたいと思います。

武村 司馬先生は、近江が好きだとおっしゃってくださいました。松尾芭蕉も、近江の人が好きだという句を残してくれました。考えてみると、あの戦国時代からこの琵琶湖の周りにはきら星のごとく、たくさんの城が並んでいました。ここは米原で、少し行った所に琵琶湖がございますが、この米原から北の方には浅井長政の小谷城がございます。そして、湖岸には豊臣秀吉の長浜城がそびえ立っていました。そして南には、石田三成の佐和山城、その後、井伊さんの彦根城ができました。さらに南に行くと、織田信長の安土城がそび

え立っていました。さらに、大津には明智光秀の坂本城、京極高次の大溝城もありました。

この周りに中世、戦国時代を代表する武将の城がずらりと並んでいたことを思いますと、やはり琵琶湖が武將たちの気持ちを引きつけた、青い、きれいな琵琶湖が人々を引きつけたのだらうと思います。その琵琶湖が放っておけばどぶになると心配しながら、司馬先生は逝かれました。幸い、この20年間、どぶに近づいていらないと思います。歴史知事も、どぶにならないように、赤潮が出ないように、水質が少しでもよくなるように一生懸命頑張った。少なくとも悪くはなっていません。さらに水の汚濁をこれ以上進めないように努力をしていっていただきたいと思っています。

**古屋** シンポジウムの締めくくりは、今の武村さんの言葉を受けまして、司馬さんご自身の言葉で締めくくりたいと思います。『近江散歩』で司馬さんは、私どもの運命はコンクリート病にかかっているというふう

に嘆かれて、近江を詠った芭蕉も大事だが、開発から自然環境を守ることが非常に大事なのではないかと説きながら、舟で琵琶湖に出て、その帰るくだりの文を読ませていただきたいと思っています。

「朗読」

帰り舟のなかで、  
「浜の真砂が尽くるとも」  
という不安がたえずあった。古歌などに、決して尽きることがないという安堵の上に立った表現として浜の真砂がよくつかわれる。私事ながら、私の小学校以来の古い友人が、先年なくなったが、謡曲が好きで、「関寺小町」のそのくだりをよく謡っていた。「近江の湖のさざ波や、浜の真砂は尽くるとも、浜の真砂は尽くるとも、詠む言の葉はよも尽きじ」。

よも尽きじ、といつても、たとえば鳩の海が尽きだつた芭蕉などの言葉だけが尽きずのこつたところ、なにもならない。真砂の尽きる世にならぬよう祈らざるをえない。

司馬遼太郎





## 『街道をゆく』と近江学

文：加藤賢治  
（成安造形大学附属近江学研究所 副所長）

「近江」というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。（「湖西のみち」より）

司馬遼太郎『街道をゆく 湖西のみち』はこの文章から始まる。そして、「近江からはじめよう」と、『街道をゆく』という長大な連作紀行文の門出となっている。なぜ、司馬遼太郎氏は、近江をその出発点としたのであろうか。文章の中では、「京や大和がモダン墓地のようなコンクリートの風景にコチコチに固められつつあるいま、近江の国はなお、雨の日は雨のふるさとであり、粉雪の降る日は川や湖までが粉雪のふるさとであるよう、においをのこしている。」と語り、高度経済成長によって急速に近代化されていく世の中にあつて、「近江の国」は、司馬氏にとつてその国名の通り、「あわあわ」とした、懐かしくもあり、深い歴史の痕跡も多く残る魅力のある場所であつたのだろう。

## 交通の要衝が文化を育む

近江の国は、琵琶湖という大運河が中央に存在し、その周りを網の目のように街道が張り巡らされ、水陸合わせた交通の要衝であつた。そして、人々は、水陸の道を使つて様々な物資を運ぶと同時に情報と文化を伝播したのである。

したがって、時代によって異なるが、近江の国の各所には、全国から様々な文化が流入し、そこに暮らす村人たちが受け入れ、信仰や伝承とともに唯一そこにのみ存在するという地域文化として大切に受け継がれてきたのである。これだけ多くの独特な地域文化を有する都道府県は、全国広しといえども滋賀県をはじめ、数える程であらうと思われる。

近代に入って、鉄道が敷かれ、明

治時代の終わりには琵琶湖も旧街道も主要な物流の本流からはずれず。そして、近代化の波は、関東、中部、京阪神から急速に押し寄せたが、幸いにも近江の国はその波に吞まれないで進んだという幸運によって、近江の国の各所で近世的な地縁、血縁による地域コミュニティが維持され、そのコミュニティが、民間信仰や伝承、祭礼行事などを伝え残してきた。

## 近江は歴史の宝庫

歴史の舞台としての近江を見ていくと、古代から近代まで切れ目なく日本の歴史に語られる事象で埋め尽くされ、歴史上の人物もここを必ず通つていくことがよくわかる。

古代、小国が分立し、大和王権が各地の豪族を束ねる仕組みが整いつ



高島市マキノ町海津の橋板 写真提供：石川亮

群などは、朝鮮半島から製鉄や機械織り、仏教など最新の技術や思想を携えてやってきた渡来系氏族の墓であろうと推測されている。湖西の小野には、聖徳太子の命で初めて隋へ渡つた小野妹子、湖東の犬上郡には、遣唐使として初めて唐に渡つた犬上御田鎌など、渡来系氏族として朝廷で大活躍する人々が近江を本拠地としていた。

七世紀半、大化の改新というクーデターによって台頭した中大兄皇子が天智天皇となつて都を大津京に移し、天智天皇の死後、子である大友皇子と弟である大海人皇子が対立、近江を舞台に壬申の乱が勃発した。



高島市マキノ町海津 写真提供：石川亮

また、この時代には、「あかねさす紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖ふる」を詠んだ額田王を代表とする多くの万葉歌人が近江の旅情を詠つた。

奈良時代、聖武天皇が仏教を興隆すると、僧良弁が石山寺を、行基が竹生島宝蔵寺、泰澄が湖北己高山に観音寺（鶏足寺）を創建するなどし、早くも仏教文化がこの地に根づいた。そして、平安時代には最澄が比叡山に延暦寺を創建して日本に天台宗を開き、円仁、円珍、良源、源信などの高僧が活躍した。その流れを受け継いだ法然や親鸞などの新宗派の宗祖たちはこの比叡山で鎌倉新仏教の礎を築いたのである。

中世は、群雄割拠の時代である。交通の要衝である近江は、「近江を制するものは天下を制する」といわれるほどの重要な地点であり、多くの山城が各地に築かれた時代でもある。室町時代は、近江源氏佐々木氏の流れを引き継ぐ京極氏が北近江を、六角氏が南近江を領有した。その後、戦国期に入ると北近江に浅井氏が台頭、織田信長、豊臣秀吉、石

田三成、明智光秀などの武將が近江を舞台に活躍する。

文化の面では、応仁の乱によって戦渦を逃れてきた都の文化人（貴族）が琵琶湖畔の素晴らしい風景を中国の瀟湘八景になぞらえて描いた近江八景が成立、仏教界においても、蓮如上人や一休禪師が近江を訪れ、偉大な足跡を残している。

近世、江戸時代は、彦根に城が築かれ徳川譜代大名の井伊家が治め、八幡や大津は幕府の代官所の直轄領となり、その他、幕府の旗本領や公家や寺社の領地の他、膳所藩、大溝藩、水口藩などの小藩が置かれた。文化、学問分野では、武將であり作家、茶人でもある小堀遠州、「近江聖人」と呼ばれた陽明学者中江藤樹、朝鮮外交で稀有な役割を果たした雨森芳洲、俳諧の北村季吟、その季吟に学び近江をこよなく愛した松尾芭蕉、考古学の祖、木内石亭など多くの人物が近江に関係している。

そして、旧街道は大名行列で賑わい、西国巡礼や伊勢参りなどの巡礼者も近江を通り抜け、八幡、五個荘、日野、高島を本拠とするいわゆる近

江商人は、その街道を利用して活躍し、その後も近代日本の発展に大きく寄与した。

近代に入ると、近江一国を中心とした滋賀県が誕生した。交通運輸では琵琶湖に蒸気船が浮かび、当時「陸蒸気」と呼ばれた汽車が走つた。湖北には巨大な製糸場が完成し、日本の近代化の一翼を担い、京都と大津を結ぶ琵琶湖疎水は海外からの高度な土木技術を学んで完成した。

近江の歴史を語ると、切りがない。まだまだ多くの未読の文書が残り、未発掘の史跡が点在する。今後、歴史学者の活躍によって近江発の新たな日本の歴史が語られようとしている。

## 自然の恵みとそれらを享受する人々の暮らし

近江のもう一つの大きな特徴は、琵琶湖を中心として、山々に囲まれ、そこから湧き出る豊かな水源に恵まれた「山」と「水」の聖地であるということである。

そして、その大地に古代から人々の暮らしが連続と繋がってきた。高





高島市新旭針江地区のカバタ 写真提供：石川亮

良質の米と清き水の存在が必要条件となるものに「酒」がある。近江には旧街道沿いの各地に特色ある酒蔵が残っている。その土地でなければつくることできないという唯一性が地酒としてのブランドを高めている。

そして、湖の幸として湖魚をあげないわけにはいかない。米と結びついたフナ、鮎、ハスなどのなれ鮎という発酵食品の存在が近江の伝統的な食文化の代表といえる。また、餅米からつくってお餅の文化も各地で見られる。各集落の鎮守の神様の前には、神田が用意され、年に一度の祭礼ではそこで育まれたお米から大きな餅がつくられ、新年や秋の神事で奉納される。大地と湖や川の恵みに感謝し、なれ鮎や、餅などその場でつくられる絶品を神に捧げるという文化も一つの大切な食文化といえよう。

食文化に限らず、生糸を原料とする和楽器の弦や、和紙づくりなども地域独特の成分を持つ「水」をもとにした伝統産業として受け継がれている。

そして、近江での暮らしに不可欠な祈りの文化も各地に根付いている。竹生島の弁才天、湖北観音の里の十一面観音、思古淵神、各地域に祀られる龍神さんなど、水の守り神として知られる神仏が、近江には多く存在する。

### 『街道をゆく』と近江学

私が所属する近江学研究所では、このように、人々が自然の恵みの恩恵を受けながら、生きていくために知恵を絞り、周辺の小さな共同体を大切に、神仏と共に暮らす人々の暮らしのかたちに焦点を当ててきた。なぜならそこには、閉塞感をおぼえる現代社会の課題を乗り越えるための新しい価値や思想が潜んでいると考えるからである。

司馬氏は、『街道をゆく』の中で、歴史、文化の根底を探りながら、『湖西のみち』での北小松漁港、『北国街道と脇街道』の海洋の浜、『甲賀と伊賀のみち』の御斎峠、『叡山の諸道』での横川の元三大師の伝承、『近江散歩』の近江八幡のヨシ原、などを取り上げ、そこに暮らす人々

の古き良き生業や信仰について触れている。当時は、高度経済成長の最終章であり、科学技術の進歩によって近代合理主義が一つの教義である信仰のように人々の心を凌駕していた時代に、司馬遼太郎氏は、あわわとした国名が好きであると言いつながら、次世代を憂いて、近江の風土の根底に流れる日本人が大切に残さねばならない価値や思想を見ていたのではなからうか。

『街道をゆく』シリーズで取り上げられた数々の近江の魅力は、司馬氏独特の視点で語られており、この著作は、近江の大きな歴史遺産として捉えることができる。

次頁のMUSUBU地図は、近江の多層に重なる自然や歴史文化を分解し、また重ね合わせたものであるが、今回、司馬遼太郎氏の足跡がその要素に加わったことは、近江学という研究において大変幸せなことである。

# MUSUBU地図について

文：石川亮  
(成安造形大学附属近江学研究所 研究員)

## MUSUBU地図の始まり

MUSUBU地図は2015年秋に成安造形大学で開催されたMUSUBU SHIGA空想MUSEUM（近江のかたちを明日につなぐ）の展覧会（10月31日～11月29日）において同大学の附属研究機関である近江学研究所より展示作品の一つとして同研究員の加藤賢治と石川亮によって制作、編集された。

その主旨は展覧会のタイトルに示されているように近江（滋賀県）を形作っている様々な関係性を「結ぶ」意図を持って制作された。それは近江（滋賀県）の暮らしの基盤となる自然、地理、交通に関してひとまず焦点をあて、それぞれを階層分解した図を制作した。即ち自然から与えられた恩恵としての大地に立ち、人々の往來の痕跡が文化や生業を育み、今日に至って未来へと結ばれて

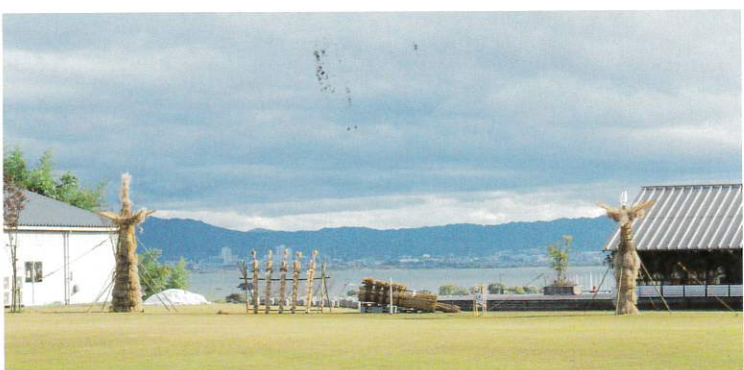
いる。これを分解と再構築で地図に落とし込むことが表現である。



展覧会ロゴとヨシ松明の展示 写真提供：成安造形大学

その階層分解は「等高線・等深線」「河川・湖」「山・湧水」「近世交通図/湖上交通・港」「近世交通図/街道・宿場」「現代交通図/高

特徴は隠蔽率が高いことであり、地図の緻密な情報を印刷技術精度の高さと共に的確に表現することができた。



琵琶湖を背景にヨシ松明の展示 写真提供：成安造形大学



## MUSUBU地図の展開

MUSUBU地図の次なる展開は汎用版ヴァージョン1.0で7つ目の階層をその都度、「結ばれる企画」のテーマに即した形で制作することである。また、そのテーマに合わせて、他の階層も別の観点の地図に変更できる自由度を持ち、MUSUBU地図そのものの展開と可能性を広げて行ける準備をしている。

次の企画テーマとして展開することとなったのが近江（滋賀県）にゆかりのある文学作家「司馬遼太郎 街道をゆく」の企画である。名著『街道をゆく』が近江から始まったことを糸口として滋賀県民がより深く近江（滋賀県）の潜在能力や魅力を深め、再確認、再認識するとともに没後20年を記念することを目的に2016年4月23日米原市にて「司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム」が開催された。この企画に合わせて7つ目の階層として「司馬遼太郎『街道をゆく』」の制作に取組んだ。制作にあたっては、司馬遼太郎

没後20年記念シンポジウム実行委員会と公益財団法人司馬遼太郎記念財団の多大な協力を得た。シンポジウムの会場となった滋賀県立文化産業交流会館のロビーにてMUSUBU地図の展示を行うと同時に合わせて汎用版ヴァージョン2.0が発行され、シンポジウム参加者に配布を行った。先述したように近江の暮らしとその基盤となる自然、地理、交通に焦点をあてながら司馬遼太郎の足跡を辿った図を構成している。ここで改めてMUSUBU地図は日常的な位置確認のための地図では決まてないが、そこに描かれた要素の関係性を「結ぶ」地図として鑑賞していただきたいと希望している。

最後にMUSUBU地図汎用版ヴァージョン2.0に記載されているコンセプト及び、司馬遼太郎『街道をゆく』の階層解説を書き留めておきたい。

MUSUBU地図Ver.2.0  
コンセプト解説文

奈良時代、近江の国の長官を務めた藤原武智麻呂が、その家伝に「近江の国は天下の名地（略）この公私往來の道、東西二陸の候也」と書き記したように、古代から近江の国（滋賀県）は交通の要衝であったことが知られている。

近世には琵琶湖を囲むように旧街道が巡り、東国から京へ、京から東国へと多くの人々の往來があり、そして、琵琶湖も水の道として機能し、東北、北陸からの物資を満載した無数の木舟が白波を立てながら湖上を走った。人々は、水陸の道を使って様々な物資を運ぶと同時に情報と文化を伝搬し、あらゆる物を結びつけた。

この地図は、成安造形大学近江学研究所の研究者とグラフィックデザイナーが協働し、「等高線・等深線」「河川・湖」「山・湧水」「近世交通図／湖上交通・港」「近世交通図／街道・宿場」「現代交通図／高速道路・主要な国道・鉄道・駅」そして、

文学者が注目した地域、史跡や社寺、山や川、老舗など、様々な要素を独自の視点で重ね合わせた。

この地図の特徴は地名表記が無いこと、縮尺規定が無いことにある。近江の特定の地域を対象とすることや使用目的を限定する地図ではない。水陸を縦横無尽に人々が行き交い、文化が伝播した痕跡を原始脳で読み解くものとして、表現している。形や記号のみで表現され、見る人が想像を膨らます地図として眺めてみていただきたい。（加藤、石川）

MUSUBU地図Ver.2.0  
階層の解説文

『司馬遼太郎『街道をゆく』シリーズは近江からはじまった。近江において古代、中世、近世、近現代のいずれの時代も話題に事欠くことは無い。司馬氏独特の鋭い接点で切り込まれた地域や場所、人物は、その魅力に一層の深みが増す。この足跡は、すなわち唯一無二の貴重な近江の潜在力なのである。（加藤）





「街道をゆく」は近江からはじまった

「街道をゆく」は近江からはじまった。司馬遼太郎の「街道をゆく」は、近江から始まった。...

米原で1500人参加

米原で1500人参加。米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。...



米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。

【2016年4月24日(日) 朝日新聞】

「街道をゆく」は近江からはじまった

「街道をゆく」は近江からはじまった。司馬遼太郎の「街道をゆく」は、近江から始まった。...



米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。

司馬遼太郎没後20年 米原でシンポ

司馬遼太郎没後20年 米原でシンポ。米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。...

【2016年4月24日(日) 産経新聞】

没後20周年記念シンポ 司馬遼太郎 魅力語る

1500人熱心に耳傾ける

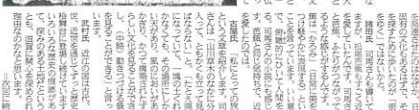


没後20周年記念シンポ 司馬遼太郎 魅力語る。米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。...

【2016年4月24日(日) 毎日新聞】

芭蕉に通じる俯瞰的な視点

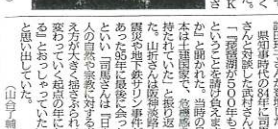
芭蕉に通じる俯瞰的な視点。司馬遼太郎の「街道をゆく」は、芭蕉に通じる俯瞰的な視点を持つ。...



【2016年5月2日(月) 産経新聞】

湖国とのゆかりのしるし

湖国とのゆかりのしるし。司馬遼太郎の「街道をゆく」は、湖国とのゆかりのしるしを持つ。...



【2016年4月24日(日) 京都新聞】

司馬さんファン 近江の地に開く。米原市で「街道をゆく」のシンポジウムが開かれ、約1500人が参加した。...

【2016年4月24日(日) 読売新聞】

人引きつける青い琵琶湖

人引きつける青い琵琶湖。琵琶湖の青い水が、人々を引きつける。...



【2016年5月3日(火) 産経新聞】

人間らしく生きる共生の地

人間らしく生きる共生の地。司馬遼太郎の「街道をゆく」は、人間らしく生きる共生の地を描く。...



【2016年5月5日(木) 産経新聞】

日本の「原形」が滋賀にある

日本の「原形」が滋賀にある。滋賀県の自然と文化が、日本の「原形」を形成した。...



【2016年5月4日(水) 産経新聞】

今も静かに人を迎える

今も静かに人を迎える。滋賀県の自然と文化が、今も静かに人を迎える。...



【2016年5月7日(土) 産経新聞】



文化往来

滋賀県東部市(4月20日)「街道をゆく」...

滋賀文化事情

滋賀で開かれた司馬遼太郎 没後20年記念シンポジウム

滋賀県東部市(4月20日)「街道をゆく」...



【2016年5月13日(金) 日本経済新聞】

【『湖国と文化』156号(公財)滋賀県文化振興事業団】

週刊朝日

山形哲雄 山形哲雄 山形哲雄...



山形哲雄 山形哲雄 山形哲雄...

週刊朝日

日本人の大本拠 日本人の大本拠...



日本人の大本拠 日本人の大本拠...

「近江への視点、日本への警告」 司馬遼太郎 没後20年 シンポジウム

【2016年7月1日号 週刊朝日】

『街道をゆく』がうまれるまで

「『街道をゆく』は、十数年の年月をかけて...



291 司馬遼太郎の言葉3

毎日、夫婦で散歩し 気分転換と頭の整理...

293 司馬遼太郎の言葉3



294 司馬遼太郎の言葉3

目の前の風景を消し 元通りに組み直す...

296 司馬遼太郎の言葉3

【『週刊朝日MOOK 没後20年 司馬遼太郎の言葉3』 2016年12月25日】



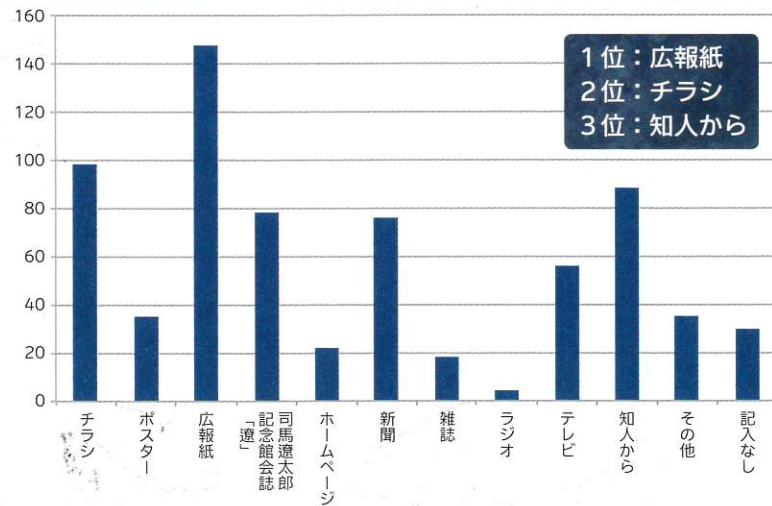
### ③ 居住市町

県内		県外	
大津市	84	北海道 札幌市	1
草津市	31	新潟県 新潟市	1
栗東市	6	千葉県 新津市	3
守山市	21	埼玉県 我孫子市	1
野洲市	14	埼玉県 秩父市	2
近江八幡市	28	埼玉県 朝霞市	1
彦根市	58	埼玉県 春日部市	1
米原市	40	東京都	2
長浜市	45	江東区	1
高島市	19	東久留米市	1
東近江市	39	練馬区	1
甲賀市	12	八王子市	1
多賀町	1	世田谷区	1
湖南市	12	横浜市	6
日野町	6	海老名市	1
竜王町	2	藤沢市	1
愛荘町	3	川崎市	1
豊郷町	1	秦野市	2
計	422	愛知県	1
		名古屋市	6
		小牧市	2
		豊橋市	1
		岡崎市	1
		名張市	1
		春日井市	2
		津島市	1
		瀬戸市	1
		幸田市	1
		西尾市	1
		大府市	2
		岐阜県	3
		岐阜市	4
		不破郡	3
		大垣市	3
		垂井町	3
		揖斐郡	1
		揖斐川町	1
		羽島市	1
		三重県	1
		四日市市	2
		鈴鹿市	2
		亀山市	1
		松阪市	2
		桑名市	1
		三重郡	1
		坂井市	2
		吉田郡	1
		福井県	2
		敦賀市	1
		長岡京市	2
		伏見区	2
		京都市	7
		城陽市	2
		宇治市	3
		大阪府	4
		大阪市	7
		堺市	2
		吹田市	2
		東大阪市	5
		八尾市	1
		大東市	1
		茨木市	2
		東淀川区	1
		高槻市	1
		富田林市	1
		豊中市	2
		寝屋川市	1
		四条畷市	1
		奈良県	6
		奈良市	6
		生駒市	1
		兵庫県	2
		芦屋市	2
		西宮市	5
		神戸市	4
		宝塚市	1
		福岡県	1
		古賀市	1
		久留米市	1
		大分県	2
		宮崎県	1
		宮崎市	1
		計	156

県内 73% 県外 27%  
遠くは北海道から九州まで全国各地からご参加いただきました。

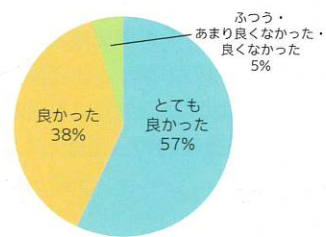
### ④ シンポジウムを知った理由

チラシ	98人
ポスター	35人
広報紙	148人
司馬遼太郎記念館 会誌「遼」	78人
ホームページ	22人
新聞	76人
雑誌	18人
ラジオ	4人
テレビ	56人
知人から	88人
その他	35人
記入なし	30人



### ⑤ 今回のシンポジウムについて

とても良かった	267人
良かった	179人
ふつう・あまり良くなかった・良くなかった	22人
有効回答数	468人

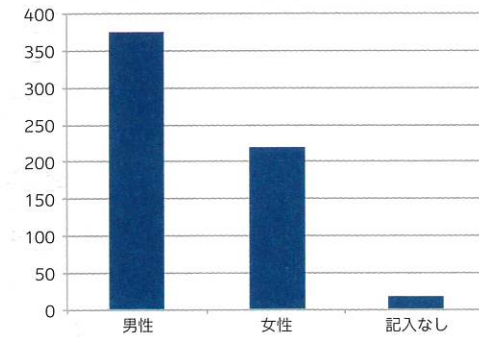


「とても良かった」、「良かった」が全体の95%



### ① 性別

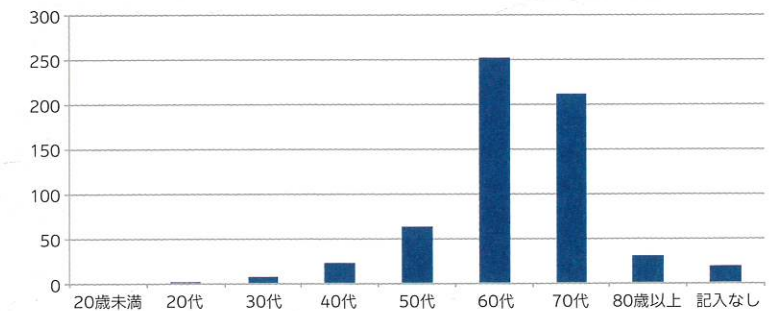
男性	374人	61%
女性	219人	36%
記入なし	17人	3%
合計	610人	100%



男性の参加が6割  
女性の参加が  
4割となっています。

### ② 年代

20歳未満	0人	0%
20代	1人	0%
30代	7人	1%
40代	23人	4%
50代	64人	10%
60代	252人	41%
70代	212人	35%
80歳以上	31人	5%
記入なし	20人	3%
合計	610人	100%





- ・先人達が努力をし、伝え残してくれた青い空、蒼い湖を永久に守り、そこから与えられる力強い人の営みの幸せを多くの人に感じ取ってもらえる世の中にしたと思いました。
- ・これから、司馬さんのことを勉強したいと思った。日本のことを考えられる人間になりたいと思った。
- ・滋賀のもつ、“歴史の深み”というものを改めて感じた。
- ・旅の目的にその土地の匂いを知ることの大切さ。改めて滋賀の良さがわかりました。
- ・滋賀の歴史と自然を生かした観光資源の開発のヒントにならないかと思い参加しました。その為には、もっと広く、深く、滋賀、近江を知る必要があると思いました。司馬さんやパネリストの皆さんの視点を通じて、魅力を再発見していきたいと思います。
- ・切り口は素晴らしい。できれば、白洲正子氏もとりあげてはいかが。
- ・司馬先生の近江の良さを再認識させられました。近江の良さの発信が不足しているのを痛感させられました。
- ・司馬遼太郎と近江を結ぶ意味は、滋賀のすばらしさだけを特化して言うのではなく、「日本の良さの根源が近江にある」という汎用性を大事にするのが重要と思う。
- ・テーマを絞り、現地学習もおもしろいのでは！
- ・若い人達をもっと多く参加するようにするためには、何か良い手だてがないのでしょうか。
- ・都心の中のシンポジウムにはない、初夏の日射しの中の山なみや空気に包まれた美しい日本の恵みを感じながらの貴重な機会に参加できて有意義で幸せなイベントでした。
- ・シンポジウムに参加できたことは、単なる生きている自分ではなく、そこにある空気と人情とその土地の歴史を知ることの意義を改めて、自覚することが出来ました。非常に有意義でした。ありがとうございます。

## Q. 司馬さんゆかりの地で訪れたいところはどこですか。

滋賀県内（近江）が約58%。（回答者数314のうち182）

1位	朽木	40人
2位	鬼室神社、余呉湖	20人
4位	安土（安土城）・湖西	13人

滋賀県内 [ ]内は、回答数（複数回答可としている）

大津エリア……比叡山[9]、坂本[7]、大津[3]、日吉大社[1]、逢坂の関[1]、義仲寺[1]、小野神社[1]  
7か所

湖南エリア……湖南[1] 1か所

甲賀エリア……紫香楽宮跡[6]、甲賀[5]、信楽[3]、多羅尾[1] 4か所

東近江エリア……鬼室神社[20]、安土（安土城）[13]、近江八幡[8]、日野町[8]、石塔寺[4]、蒲生[4]、  
五個荘金堂[3]、馬見岡綿向神社[2]、水郷めぐり[1]、西の湖[1]、外村繁生家[1] 11か所

湖東エリア……彦根[7]、彦根城[4]、多賀大社[1]、湖東[1] 4か所

湖北エリア……余呉湖[20]、賤ヶ岳[10]、姉川古戦場[9]、国友[9]、寝物語の里[9]、伊吹山[7]、長浜[4]、  
湖北地方[3]、小谷城跡[2]、木之本[2]、柏原宿[2]、栃ノ木峠[2]、北国街道[2]、  
浅井長政ゆかりの地[1]、米原[1]、石田[1]、己高山[1]、観音の里[1]、雨森芳洲[1]、  
竹生島[1] 20か所

湖西エリア……朽木（朽木谷、陣屋、朽木街道）[40]、湖西[13]、興聖寺[6]、安曇川[6]、鯖街道[5]、  
高島[4]、海津[2]、白鬚神社[1]、今津[1]、針江[1] 10か所

その他……近江[8]、中山道[6]、琵琶湖（周辺）[5]、近江商人の地[2]、東海道[1] 5か所

県外：函館、岐阜、関ヶ原、京都、奈良、伊賀、萩、岡山、松山、高知、熊本、長崎、鹿児島、司馬遼太郎記念館など  
海外：オランダ、アイルランド、韓国、中国、台湾、モンゴル など

## Q. なぜ、司馬さんは近江が好きだと思いますか。

主なご意見

- ・自然、人の融合など（日本文化の分岐点をなすと共に融合し、独自のものを）何故か心のふるさとも感じるものがあるからではないか。
- ・歴史があるのに開発されていない風土や、思いやりを含んだ近江ことばの美しさが京都、大阪の言葉にとり込まれているなど近江にある素直さが好きなのだと思う。
- ・日本人の心の故郷だから。
- ・近江は歴史上交通の要衝が数多くあり、かつ、神社、仏閣が多いこと。風景、人々の暮らしが昔のまま残されているところが多い。近江の人々のあたたかさ。山・湖・歴史・文化が融合している地域。
- ・豊かな自然に恵まれている。古来歴史上の重要分岐点となった場所、時代に充ちているから。
- ・日本人の心、道徳、歴史、風景、その全てが近江に繋がる。
- ・歴史の深さ、多様さだと思います。司馬さんの好きな近江に住んでいる、ということについてあらためて誇りのようなものを感じました。
- ・最初は理屈ではなく、山と琵琶湖のある風景が単純と好きだったと思う。その後、地勢的にみて、京都や奈良、西国方面へ、また東は尾張や越前の方から、全国へつながっていく広がりを感じられる点。歴史的に見れば、日本の歴史の始まりから、ずっと歴史の本流にかかわっていたことなどが、その思いをより強くしていったと思う。
- ・近江は歴史の宝庫だからでしょう。古代から今に至るまで人との交流が絶えることがない場だと思う。
- ・琵琶湖を中心として形成された「近江人」が、この日本をつくりあげてきたのではないかという、この世界に誇るべき日本人の気質をつくりあげてきたという確信からでは。
- ・地の利、水の利によって育まれた人々の暮らしに魅了されたのだと思います。近江商人や戦国武将のバラエティ豊かな才人がたくさん出る土地だから。
- ・とても愛しておられたと思います。広大な近江平野、遠くに連なる山並み、そして琵琶湖、近世まで歴史の表舞台であったこと。歴史を動かした英雄たちが活躍し、幾多の名も無き人たちが生きた地。
- ・歴史的に重要な位置を占めていた点であり、通行の要衝であり、明るい雰囲気漂っているのを感じておられたのではないかとと思われる。
- ・豊富な自然と歴史が感じられるから。日本の良さの原点となる。

## Q. シンポジウムに参加した感想をご記入ください。

主な感想・ご意見

- ・参加して近江、滋賀県の魅力がより一層増した気がします。美しい湖国がより一層、良き地域となるように願っています。
- ・近江をもっと知りたいと感じました。中世武将の城と水、宗教、渡来人。
- ・遠方からの参加でしたが、良い時間を過ごすことができました。これからの日本について責任を持ちたいと思います。
- ・近江、滋賀県の素晴らしさを再確認しました。もっともっとその素晴らしさを発信してほしい。関西では京都、大阪、兵庫、奈良のポジションが高いが、それ以上だと思うので。
- ・司馬さんの残した多くの作品を少しでも読んで、今後の日本を考える一助にしたい。
- ・滋賀の観光イベントだけで終わってほしくない。各地でイベント“日本人とは”“この国とは”につなげて欲しい。



# シンポジウム「『街道をゆく』は近江からはじまった」 記録集発行に寄せて

思い起こせばきっかけは1つの新聞記事だった。菜の花忌と呼ばれる司馬遼太郎先生の命日に合わせた第19回菜の花忌シンポジウムの開催を告げるものだ。ということは、来年は20回の節目となるのか。司馬先生の作品には滋賀の土地や人物が数多く登場する。記念すべき年のシンポジウムを滋賀で開催していただきたいと無謀にも司馬遼太郎記念財団にお願いした。

震えた。「やろう！」。シンポジウムの開催が本決まりになった後も、開催時期、登壇者やテーマの選定、広報の仕方など記念財団にはさまざまにご指導いただいた上に、記念館の会誌「遼」での紹介、菜の花忌シンポジウムでの開催案内までお力添えをいただいた。おかげさまで、4月23日のシンポジウムでは早くからお並びいただいた方もあり、全国各地からお越しいただいた1,500人の方々が席が埋まった。

答えは否。しかし、直接対応してくださった上村洋行理事長は、菜の花忌シンポジウムは難しいが、滋賀県が主催するシンポジウムへの協力ならしてもよいと言ってくださった。実は記念財団が他の主催事業に関わるのは、古くからのゆかりのあるごく限られた催し以外ほとんどないとのこと、異例中の異例だ。担当者から報告を聞いた私の心は打ち

上村理事長の講演は、義弟として生活を共にし、間近に見てこられた司馬先生の姿、『街道をゆく』が生まれるまでの様子が目の前に浮かぶよう、生前にお会いする機会がなかった者として本当にありがたかった。また、山折哲雄氏、諸田玲子氏、

武村正義氏というお三方のパネリストに、司馬先生と長年親交があり、司馬先生から譲り受けられたという背広で登場された古屋和雄氏をコーディネートに迎えたシンポジウムは、それぞれの方が司馬先生への思いや作品に対する思い、そして滋賀・近江について大いに語ってくださった。古屋氏には、『街道をゆく』の朗読もしていただき、いち参加者として、心にしみる忘れられないひとときとなった。

しき、奥深さを未永く子どもたちに伝えることが私たちの使命ではないかと考えている。このシンポジウムをその道筋の第一歩としたい。最後にこのシンポジウムの開催にあたり、ご指導、ご協力いただいた司馬遼太郎記念財団、実行委員会の皆様改めて感謝申し上げます。

司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム  
実行委員会会長  
**三日月大造**



## 早朝勉強会

まずは自分たちが作品を深く知らなくては、どの好事の発案で、シンポジウムに向けて、三日月知事をはじめ、県職員たち有志が朝の7時から、そして時には昼食時間を利用して集まり『街道をゆく』勉強会を開きました。

滋賀の地が登場する『街道をゆく』や講演録などを、地図や参考にした資料とともに読み解きながら、司馬先生が近江の地に強い関心と憧憬の念を寄せられたのはなぜか、そこに向けられたまなざしにどんなメッセージが込められているのかと思いを寄せました。2月12日の勉強会では菜の花を飾り、司馬先生を偲びました。

- 2015年
- 8月31日 「湖国と文化」掲載の講演「近江について」
- 同日 座談会「司馬遼太郎氏を囲んで 滋賀は…」
- 10月5日 『湖西のみち』
- 10月26日 『北国街道とその脇街道』
- 11月30日 『叡山の諸道』前半
- 2016年
- 1月18日 『叡山の諸道』後半
- 2月12日 『近江散歩』
- 3月15日 『韓のくに紀行』対談「琵琶湖を語る」



## 司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム実行委員会

氏名	職名	組織名
岡本 光夫	会長	滋賀文学会
三田村悦子	会長	滋賀県公共図書館協議会
岸野 洋	理事長	(公財) 滋賀県文化振興事業団
木村 至宏	代表幹事	文化・経済フォーラム滋賀
藤井 勇治	会長	近江歴史回廊推進協議会
中川 浩	取締役社長	(株)しがぎん経済文化センター
大田 啓一	理事長	滋賀県立大学
岡田 修二	会長	成安造形大学
嘉田由紀子	会長	びわこ成蹊スポーツ大学
中西 薫	会長	滋賀県立文化産業交流会館
日比 均	市民部長	大津市
大久保 貴	市長	彦根市
米澤 辰雄	市民協働部長	長浜市
青木 勝治	総合政策部長	近江八幡市
福山 勝久	局長	甲賀市
橋本 武美	局長	高島市
中谷 逸朗	局長	東近江市
平尾 道雄	市長	米原市
今宿 綾子	会長	日野町
三日月大造	知事	滋賀県



『街道をゆく』は  
近江からはじまった

司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム記録集

---

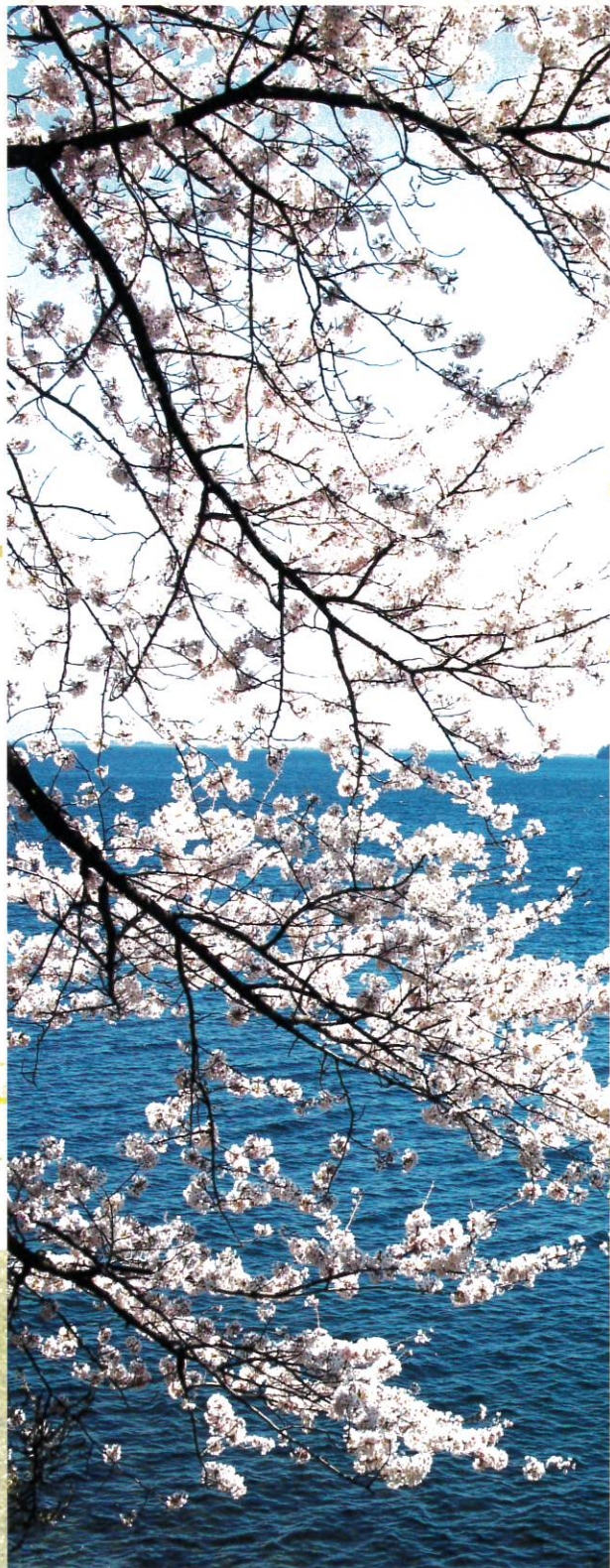
編集・発行 司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム実行委員会  
滋賀県大津市京町四丁目1-1  
(滋賀県文化振興課内)

協力 司馬遼太郎記念財団

印刷・製本 アインズ株式会社  
滋賀県蒲生郡竜王町2291-3

---





主催：司馬遼太郎没後20年記念シンポジウム実行委員会 協力：公益財団法人司馬遼太郎記念財団  
後援：朝日新聞大津総局、毎日新聞大津支局、読売新聞大津支局、産経新聞社、中日新聞社、京都新聞、日本経済新聞社大津支局、  
共同通信社大津支局、時事通信社大津支局、**NHK** 大津放送局、**KBS京都**、**朝C** **びわ湖放送**、**EFM** 滋賀、